



歩行分析の臨床への還元

10月2日(日) 15:50-16:50 会場: 第1会場

鈴鹿医療科学大学
保健衛生学部 リハビリテーション学科
畠中 泰彦

司会: 市橋 則明 (京都大学)

基礎理学療法学の中で、最も臨床に近い分野が運動学ではないだろうか。「臨床への還元」を利用者の立場で考えると、求められているのは、「良くなること」。すなわち、機能が回復する、疼痛が軽減することに、理学療法士は注力すべきである。難解な検査スコアが上がっても、それだけでは決して利用者の満足度には繋がらない。

ヒトの二足歩行は、巧妙に設計されていて、理解すべき基礎知識が多い点や、規定する因子が多い点が、歩行分析のハードルを高くしている。臨床歩行分析とバイオメカニクスは、別の学問と考える人もいるが、誤解である。

正常歩行の基盤となるのは、筋力の他、軟部組織の張力、慣性である。下肢の筋力テストがすべて 3+であっても、歩行が可能と言われている。講演では、軟部組織の張力、慣性の利用について、そのタイミングと影響を解説する。特にカタパルト機構、軟部組織リコイル、ロッカー機能のメカニズムと歩行のエネルギーの関係を示す。さらにパッセンジャーと呼ばれ、推進力に影響がないとされる体幹の異常も、臨床では多く経験する。バイオメカニクスの視点から、いくつかの知見を紹介する。

異常歩行の、どの部分が主要問題点なのか分析する上で、比較が必要である。仮説に基づき、負荷を操作する、あるいは介入の前後を観察するといった検証が必須である。また、介入についても、たとえば問題が筋力といった量的なものか、動かし方といった質的なものか、仮説を明確にすべきである。講演では、散見する異常を供覧し、そのメカニズムと推奨される介入を提案する。

かつて上田敏先生が、その著書に記された「患者さんのおかげさまで随分良くなりましたと言われる」理学療法に、歩行分析の知識、技術を役立てていただきたい。

